人間狩り
フィリップ・K・ディック（仁賀克雄訳）集英社（9／25刊・¥1200）

何れも五〇年代ディックの中、短篇。世評の高い「ゴールデン・マン」をはじめ、編者がオリジナルに選んだ九篇が収録されている。時代的に近いせいもあって、これらの作品には共通点がいくつも見られる。

例えば、戦争の影で、これはもうほとんど全てが戦争や、その戦後を背景にしている。核戦争、宇宙人との戦争などさまざまだが、五〇～六〇年代の冷戦下の荒涼さを感じさせる。あと一つ目立つのは、シミュラクラの存在だ。「ブロクスからの侵略」もそうだが、「人間狩り」あたりに典型的にあらわれてくる。ディックが以後長篇において、頻繁に使う小道具であり、テーマでもある。『解放されたSF』に入っているディックの講演文を読めば、その観念がいかに作品や、人となりに反映されていたかがわかるだろう。

長篇のディックより、短篇のディックを好むという、編者の解説に異論をいだく方も多いだろうが、晩年の長篇と比べて、少なくとも読みやすくはある。買っておいて損はしない内容といえる。ベストは、アイデアの冴える「ゴールデン・マン」と、あと「人間狩り」「偽者」「植民地」あたりか。

（俊）